

津軽の俳諧研究 - 芭蕉二百回忌を中心に -

木田 里美

津軽地方は現在の青森県西部に存在し、津軽氏が江戸時代に支配した弘前藩、黒石藩、および津軽郡の領域にほぼ相当する地域である。江戸時代に10万石の石高を誇っていた弘前藩を抱える津軽地方であるが、明治時代以降は文学活動も盛んに行われており、多くの文人や歌人が輩出されている。

明治26(1893)年は、松尾芭蕉の二百回忌という俳諧にとっては節目の年であり、全国各地で催された追善行事は松尾芭蕉を祖とする俳人達にとっては、最大の行事であった。句会や追善などの行事が行われ、記念集なども多く出版されることになった。しかし、蕉門と呼ばれる松尾芭蕉を祖とする、蕉門と呼ばれる人々が属する「旧派」の俳人たちの研究は、近代俳句研究においては注目をされていない。

本研究では、『古今俳諧明治五百題』(明治12年刊 東旭齋編)と『子規』(明治25年刊 艸々庵編)の二つの資料を用いて、青森県津軽地方にはどのような俳人がいたのか、そしてどのような句を詠んでいたのかを明らかにすることを目的とする。『古今俳諧明治五百題』は、青森県でどの程度俳諧が浸透していたかを調査するための基礎資料となる、全国的に普及した類題句集であり、『子規』は青森県弘前市で行われた芭蕉二百回忌の式典で催された句会の記念句集である。式典の会場となった弘前天満宮には、芭蕉二百回忌を記念して明治24年に建立された碑も存在している。

『古今俳諧明治五百題』の分析の結果、青森県では俳諧の図書の需要があることが判明し、また先行研究の文献からも、青森県は全域で俳諧の盛んな地域であるということが判明した。次に『子規』を翻刻して分析した結果、式典には県内外から多くの俳人が参加しており、また掲載されている句には芭蕉の句にまつわる語句が織り込まれたものが多く詠まれていることがわかった。句会に参加していた宗匠の中には、同じ津軽地方である黒石市で芭蕉二百回忌を意識したと考えられる碑を建立した者もいることがわかった。

『青森県人名大事典』(昭和44年 東奥日報社編)によると、『子規』を編んだ艸々庵は、青森県だけではなく北海道や東北地方にまで名前の知れた宗匠であり、黒石市に碑を建立した東根舎子椿は、三代にわたって俳諧に通じた黒石の要職の家系である。以上のことから、青森県津軽地方は蕉風俳諧が盛んな地域であり、また旧派の俳人達も多く存在していたということが判明した。

今後の課題は、地域に残る俳諧関係の古文書を翻刻して分析し、更なる研究を行うことが挙げられる。

(指導教員 綿抜 豊昭)